

夏まつ盛り

待ちに待った夏の到来 海や森に人が集い、子供たるみこしの 歓声が街に響き渡った

留萌三大夏まつりの一つ留萌神社例大祭が7月16日から18日の三日間行なわれました。各町内会では子供たるみこしが氣勢を上げ、商店街では多彩なイベントが繰り広げられました。神社ではちびっこ相撲大会や13年ぶりに本御輿が商店街を練り歩き、雨で順延となった留萌高校の仮装パレードなど、大人も子供も楽しい一時を過ごしました。

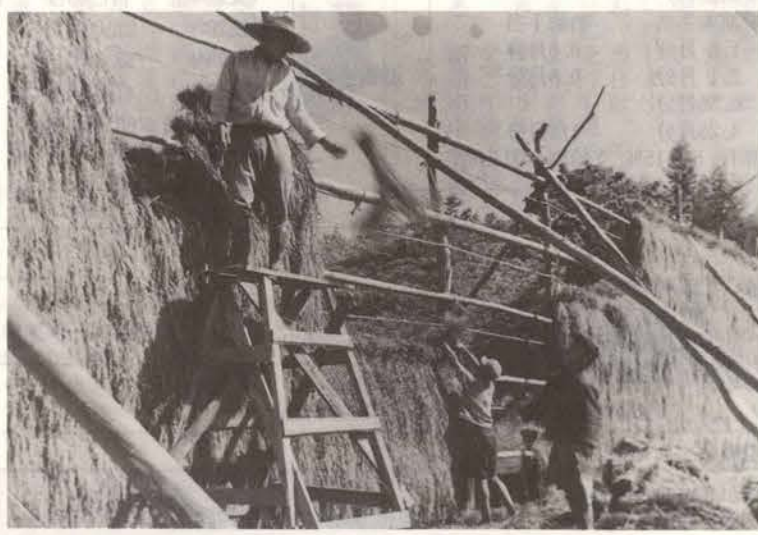


留萌の農業 3

福士 広志
海のふるさと館学芸係長

戦時中、働き手を兵士としてとられた農家は、老人、女、子供による農作業で生産性は落ちこんでいた。終戦によって昭和二十一年の自作農創設特別措置法、農地調整法の施行(農地改革)に伴う市町村農地委員選挙、北海道農業協同組合協会の結成。翌年の農業協同組合法の施行と矢継ぎ早に農業改革が断行された。また、この年留萌市は市制施行。翌二十三年には留萌市農業会が解散し、新しく留萌市南農業協同組合、留萌市北農業協同組合が設立されたが、翌年には留萌市農業協同組合に一本化された。昭和二十二年の耕地面積の内訳は田二百六十六・六ha、畑九百十・七ha、採草地二百ha計一千三百七十七haであり、戦前の昭和

七年には一千九百七十四haだったことから約六百haほど減少している。その後水稲の品種改良が進むとともに、冷害に強い稲の品種が作られ水稲の作付け面積も増加していった。また、昭和二十六年、二十年の大水害及び昭和二十八年の台風十五号による風



稲のハサガケ

田となり、留萌の農業は畑

作から稲作への大転換を遂げることとなる。この後も水田面積は増えつづけ、昭和四十五年はその面積はピークに達した。しかし、同年に始まった米作生産調整(減反)はこれ以上の水田耕作面積を増やすことを不可能とし、農家は経営の大規模化、機械化によるコストダウンを余儀なくされ、これに対応できなかった者は相次いで離農していった。この水田の大規模化を行うために、昭和四十六年には道営圃場整備事業促進期成会が設立され、翌年から五ヶ年計画で圃場整備事業が着工され、昭和五十八年に竣工した。また、稲作から園芸栽培の付加価値の高い作物への転換が行われ始めたのもこの頃である。また、平成に入ってから世界的な農作物の自由化の波は、米の自由化も例外とせず、いつそれが現実のものとなるか留萌の水田農家にとっては大きな不安材料となっている。